

内外交差点

花の都への憧れと偶然の出会い タクシー世界一周記<欧州編②>

成川 史華氏 (扇交通社長) 第7/12回

花の都・パリ。ファッション、芸術、エッフェル塔にルーブル美術館。華やかなイメージがあふれるあの街への憧れは、私の中で長年膨らんでいた。だからこそ、1週間の滞在を実現できたとき、期待はいやがおうにも高まっていた。

しかし、その第一印象は衝撃的だった。とにかく街が汚い。道端に落ち葉よりも多いゴミが散乱。歴史をひもとけば、フランス革命期には汚物を窓から投げ捨てていたという逸話もある。どんより曇った空の下、夢見ていた「花の都」はどこへやら。

泊まったのは「カウチサーフィン」で見つけた二人のホスト宅。これまでの旅先で出会った人々と比べると、やや冷たい対応だったが、それも旅の一面だろう。それでも印象を変えてくれた出会いもあった。小さなアトリエ街を訪ねたとき、同世代の若いデザイナーと話す機会を得たのだ。パリでやりたかったことの一つにファッションアトリエの見学があった。サマーバケーション中でほとんどの工房が閉まっていたなか、たまたま作業していたその子は、パリのファッション事情をいろいろ教えてくれた。日本との違いや現場の雰囲気是直接聞けたのは貴重で、パリへの印象が一変した瞬間だった。彼女との出会いの後、パリでの体験は素晴らしい出来事ばかりだった。

観光の最中にも偶然の出会いがあった。ノートルダム大聖堂を訪れた際、閉館間際に声をかけてくれたスタッフが日本人スタッフを紹介してくれ、さらに館長らしき人物の好意で一般公開されていない鐘楼の上に案内してもらえた。一般客とは異なる視点から、手の届きそうな距離で「ノートルダムの鐘」を見上げたときは、小説の世界に迷い込んだような気分だった。大聖堂ではアメリカ人女性と知り合い、意気投合してベルサイユ宮殿を一緒に巡ることに。ファッションの街・パリにきて、オシャレを楽しまずにはいられない。ドレスのような服で出歩いたり、浴衣でプラプラ散歩したり。日本文化が好きなフランス人が声をかけてくれて、日本文化に対する熱い想いを語ってくれたり、時には食事を共にした。とある夕食時には、人

が人を呼び知らない人同士が集まって自然とパーティーのようになり、旅の偶然が人をつなぐ不思議を実感した。

日常的に使った交通機関——パリの地下鉄は、とにかく汚く治安も微妙で、日本で抱いていたイメージとの落差は大きかった。公共交通とトイレに関しては「日本のほうがずっと清潔で便利だ」と胸を張って言える。どんなに汚い公衆トイレでもお金を払わないと使えない悲しさ。しかし、街歩きそのものは楽しい。石畳の通りを歩けば、古い建物の壁に刻まれた時間の重みが伝わってくる。食に関しては当たりはずれが激しかったが、現地で仲良くなった人たちとの夕食は本当に楽しかった。とある老舗レストランで隣の席のカップルがエスカルゴの食べ方に悩んでいると、私の前の席に座っていた現地のおじいさんが食べ方を教えてあげていた。興味津々で見えていたら、思わず“わぁ！”と声が漏れており、笑いながらエスカルゴをシェアしてカップルとおじいさんと私の4人でパリについて語りながら、夕食を頂いた。味ではなく、人と人との交わりが料理をおいしくする。旅を通して学んだことの一つだろう。芸術、エンターテインメント、そしてファッション——私の好きなものの原点が、この街には確かに息づいていた。

パリ滞在の後、スペインのバルセロナに飛んだ。カナダ留学時代のスペイン人の友人が案内してくれ、ガウディの建築群やランブラス通りの市場を巡った。情熱の街は気温にも表れ、非常に暑かった。バルセロナでは主に回数券でバスや地下鉄を利用したが、街並みを見る意味も込めて基本的には歩いた。それでも十分に成立するくらい、観光都市としての完成度が高かった。市場では、アイスクリーム、フレッシュジュース、フルーツを買いながら、知らない人同士が笑顔でやり取りしており、都市の活気と交通の利便性が結びつく瞬間を感じた。降りるバス停を通り過ぎて宿泊先に戻るまで迷いながら歩いた経験も、今となっては良い思い出だ。交通環境は観光だけでなく、日常生活の快適さや人との交流にも直結することを実感した。

「花の都パリ」と「活気あるバルセロナ」。2つの都市は、旅の楽しさだけでなく、都市と交通の関係の大切さも教えてくれた。

